救世主は最強の殺し屋！？

黒闇 結羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
救世主は最強の殺し屋！？

【Ｎコード】
Ｎ３５８８Ｕ

【作者名】
黒闇　結羅

【あらすじ】
「今日もまたきっと・・・」中学二年生の須藤ゆう子（すとうゆうこ）はクラスメイトの佐藤愛叶（さとうあいか）に濡れ衣をきせられ、クラスメイトからいじめを受けている。
そんなある日ゆう子のクラスに二人の男の子が転校生としてやって来た。
「この人たちも愛叶ちゃんに騙されて私をいじめるのかな？」そう思っていたゆう子だったが、何故だか二人はゆう子のことを信じい

じめから守るとまで言ってくれた。「何故この人達はわたしを助けてくれるんだろう。」

それには二人の大きな秘密が隠されていた。

第1話　今日も・・・

朝。目覚まし時計の音が私以外誰もいない広い部屋に響く。親は私が五歳の時に交通事故で亡くなってしまった。私はゆっくりとベッドから起き上がり、

「今日もきっとまた・・・」

と、呟いた。私はいじめに遭っている。佐藤愛叶ちゃんに濡れ衣を着せられて。信じてくれるひとは誰もいない。

でも、私は学校に行く。本当は怖いけどいじめには負けたくないから。

準備ができたので学校へ向かった。

クラスの前で立ち止まった。教室の扉に黒板消しが挟まっている。こんな判りやすいトラップに引っかかる馬鹿が何処にいるのだろう。私は黒板消しが挟まっていない方の扉を開け教室に入った。それを見たクラスの人達は舌打ちをしながらこちらを睨んでくる。

「お前また愛叶ちゃんをいじめただろ。泣いてるじゃねぇか！」

クラスの男子が大声をあげる。その男子の横では愛叶ちゃんが泣いている。私は、

「私、いじめたりなんかしてないよ。」

と、抗議するが皆が口を揃えて『嘘つき』だと言う。

「愛叶ちゃんをいじめた上に嘘つくなんて最低ね。」

女子の一人がそう言うとクラスの人達が私の方に近付いてきた。殴られた。蹴られた。それを必死に庇う私がみたのは、私が殴られているのを見て笑っている愛叶ちゃんの顔だった。

もう嫌だ。怖い。痛い。

誰か私を助けて下さい。

第2話　転校生

目覚まし時計の音が響く。昨日、殴られたりした傷がまだ体のいたる所に残っている。

「まだ、体が痛いな・・・」

そう言いながら体を起こす。そして、学校への道を歩きながら「今日は何をされるんだろう。」とかんがえていた。

「あれ？」

今日は何故だか教室の扉になにも挟まって無かった。なにかあるんじゃないかとかんがえたりもしたが、取り敢えず教室に入ってみた。いつもなら私が教室に入って来たら睨んでくるクラスの人達は誰一人こちらを見たりしなかった。

珍しいな、と思っているとクラスの女子たちの会話が耳にはいった。

「今日転校生来るんだよね。」

「うん！そうだよ。確か、男子が二人だったかなぁ」

「かっこいいといいよね。」

「うん！」

そうか。今日は転校生の話題で私は忘れられていたんだ。

良かった。助かった。などと思いながら、たくさんの落書きがついた席に座る。
先生が来たようだ。
「早く皆席に着け。今日は転校生が来てるからな。」
転校生という言葉を聞いた瞬間クラスの人達が素早く席に着く。
皆が席に着いたのを確認した先生は転校生に「入れ」と言った。
その瞬間。クラスの女子が叫んだ。
入って来た男の子二人はどちらも凄くかっこよかったからだ。
「じゃあ自己紹介をしてくれ。」
と先生が言うと二人は頷いた。先に口を開いたのは可愛い感じの明るそうな男の子だった。
「えーと。俺は會田雪(あいだせつ)よろしくね。」
笑顔が眩しい。ニコニコしていてとても可愛いな、と思った。
すると、今度はクールであまり喋らなそうな男の子が話始めた。
「僕は、今井直(いまいなお)といいます。宜しくお願いします。」
二人が自己紹介するとクラスの女子達がザワザワと騒ぎ始めた。
「女子達は静かにしろ。二人の席を発表するぞ。」
席か。私には関係ない・・・

「会田の席は須藤の隣。今井の席は会田の後ろだ。」
先生が席を発表した途端クラスの女子達が一斉にこちらを睨み付けてきた。
どうして先生は、この二人の席を私の近くにしたのだろうか。
「あ、えっと、須藤さんってどこ？」
「私でーす。」
？私は返事していないけど・・・愛叶ちゃんだ。
「先生！やっぱり雪君と直君の席は愛叶ちゃんの隣にした方がいいと思います。」
クラスの女子が言い出した。先生はクラスほぼ全員にこう言われたら席を替えるだろう。
「俺は須藤さんの横で大丈夫だよ。」
会田さんは笑顔で答える
「僕は雪の近くなら別にどこの席でもいいので。」
「本人が良いと言ってるんだから女子はもういいな？」
女子も流石に黙り込む。
「よし。じゃあ、須藤はそこにいるから、隣に座ってくれ。」

「はい。・・・須藤さんだっけ？よろしくね！」

「うん。」

第3話　くだらない

休み時間、會田さんと今井さんのまわりは女子で埋め尽くされていた。
女子達は二人に、「彼女いるの？」とか「好きな人は？」などと、くだらない質問をしていた。
どうでもよかったので私は教室から出て行った。

ー直ｓｉｄｅー

今は休み時間。ゆっくりできる筈の時間なのに僕達は今女子からの質問攻めに遭っている。
そのうえ、質問もたいしたこと無いものばかり。
雪はよくこんな質問に笑顔で答えられるんだろう。

などと思っていたら雪の隣の席の子『須藤さんだっけ？』が教室から出て行った。
すると、女子の顔色がいきなり変わった。そしてまわりにいた女子達はキモいｈ佐藤さんを連れてきた。
なにかあるとすぐに分かった。『雪は分かっていないようだが。』
案の定僕の予想は的中した。
佐藤さんがいきなり泣き崩れ、「私ゆう子ちゃんに虐められてるのぉ」と、キモいこｅ言った。
泣き崩れる時点で嘘だろうと思ったが、取り敢えず、

「そうなんですか。それはいけませんね。」

と言った。佐藤さんは、

「ありがとう。直君」

馴れ馴れしく名前で呼んで来た。僕はもう、厚化粧香水女〔佐藤の事です〕に耐えられなかったので、

「雪、行こう。」

と言い、ポカンとする雪をつれて教室を出て行った。

ー直ｓｉｄｅ終了ー

私は今屋上にいる。多分教室では、私が出て行ったのを良い事に好き放題言っているのだろう。

そしてあの二人も愛叶ちゃんに騙されて、私を虐めるのだろう。

そんな事を考えていると突然屋上の扉が開いた。

第４話　信じる

「なんでいきなり、教室からでるんだよ！」

「ん？それは、僕がもうあの環境に耐えられなかったからだよ。」

私の目の前でこんな会話を続ける二人。
まだ、私がいることに気がついていないのかな？
話しかけられると何を言われるかわからないので私は屋上から出ようとした。

「あ、ちょっと待ってくれませんか？」

気づいていたんだ。と、心の中で思いつつ私は二人のいる方へ振り向いた。

「何？」

と、聞いてはみたがどうせいじめの件なのだろう。

「佐藤さんの件なのですが・・・」

やっぱりか。きっと私はこの二人にも虐められるんだ！！

「須藤さん、本当は虐めてないですね。」

「へ！？」

思わず抜けた声が出る。そんなことを言われるとは全く考えていなかったからだ。

「ねぇ！本当は虐めてないよね？」

会田さんまでもそう言い始めた。

「ど、どうしてそんな事が言えるの！？皆、皆私の事を信じてくれるひとなんて誰もいなかったのに。二人共、今だけそう言って私をだますんでしょ！！」

今、心にかかっていた霧が晴れたような気がした。言いたいことを言えたせいかとてもすっきりとした気分になった。

「信じますよ。裏切りません絶対に。」

「そんなの、信じられない。」

「じゃあ、裏切らないという理由を聞く？」

「雪の馬鹿。理由なんて言ったら。」

理由があるのかな？今井さんは嫌そうだけど・・・

「理由。教えてくれるかな？」

「はぁ。ほんと、雪の馬鹿。・・・理由ですよね。教えますけど、これは絶対に他の人には話さないで下さい。」

それほどその理由が重要なものなのだろうか？

「実は僕たち・・・

第5話　理由（前書き）

いつもこの小説を読んで頂いている方々どうも！黒闇です♪
今回はこの話に登場する主要人物の紹介をしたいとおもいます。

ーキャラ紹介ー

須藤　ゆう子　性別　女

年齢　１４歳

虐められて心を閉ざしているが本来はとても明るい性格。
とても可愛い。

會田　雪　性別　男

年齢　１４歳

とても格好よくて明るく元気な男の子
恋愛事には鈍感である。

今井　直　性別　男

年齢　１４歳

格好いい。性格は、雪とは対象的にクールで落ち着いた性格。信頼していない人には敬語で話す癖がある。たまにＳな部分が見え隠れ

する。
キレると雪に「直様」と様づけで呼ばれる位怖い。

第5話　理由

「実は僕たち・・・殺し屋なんだ。」

「は？」

思っても見ない言葉が返って来た。

「殺し屋？そんな訳ないでしょ。ありえない！」

「えー。須藤さん信じてよー。」

「しょ、証拠！殺し屋だって言う証拠をみせて。」

どうせ殺し屋なんて嘘ｎ・・・

「証拠ってこんな感じ？」

今井さんの服の至るところから出てくる銃や剣やナイフの数々。
ここまで見せられたら信じるしかないのだろうか。

「本当に殺し屋なんだ・・・。で、でも殺し屋だからって私を信じる理由にはならないよ！」

「いいえ。それがなるんですよ。仕事のことは厳密にしないといけないのですが、仕方が無いので言いましょう。僕たちがこの中学校に来た理由は、今回の殺しの標的がいるからなんですよ。」

「それってまさか！？」

「はい。佐藤さんです。」

やっと分かった。この人達が私を信じてくれるという理由が。
二人は標的の情報を初めから知っていたんだ。

「わかったようですね。」

「はい。」

「って事で、俺らは仕事もしなきゃいけないけど虐めもほっとけないから佐藤をすぐに殺さず、転入してきたんだよ。と、いうことで俺らは君を虐めから守る。絶対に。」

「守・・・る・・・。」

こんな事を言われたのは初めてだ。私には両親もいないし他に守ってくれる人もいなかった。
私の目からは自然に涙が流れていった。

第6話　仲間

私は泣いた。こんなにも泣いたのは両親が死んだとき以来だ。

「そろそろ、落ち着きましたか？」

「うん。大丈夫。ありがとう。」

「でもさ、俺どうして須藤さんが泣いたのか分からなかったんだけど。俺なんか悪い事言った？」

「違うの！えっと・・なんだか嬉しくて。」

「嬉しい？」

「うん。私両親が早くに死んじゃって、あんまり守るとか言われたこと無かったから。」

弱いな。私。いつから初対面の人にペラペラと身の上を話すようになったのだろう。でも、この二人なら信用できる。そんな気がした。

「そっか。でもこれからは俺たちが須藤さんを守るからね。」

「ありがとう。名前さ、さん付けで呼ばれるの好きじゃないから名前で呼んで欲しいな」

「うん！わかった。じゃあゆう子ちゃんで！」

「僕もそう呼びます。」

「ありがとう。」

何故か言ってしまった一言。家族以外に名前で呼ばれるのは初めてだ。もしかしたら私はずっと友達、私を信じてくれる仲間が欲しかったのかもしれない。

「じゃあさ、俺達の事も名前で呼んでよ。」

これは言われると予想していなかった。自分だけで満足だったから。

「えーと、じゃあ。雪君、直君？」

「良いんじゃないですか。それで。」

「俺も良いよ。ってか直はいつまで敬語続けるつもり？」

「続ける？」

一体どうゆう事だろう。

「そう。直は初対面の人や信じていない人に敬語で話す癖があってさ。」

「そうなんだ。」

「まぁ。言われれば敬語位いつでもはずせるよ。」

「あ、ほんとだ。いまタメだった！」

「じゃあこれからはこうやって話すね。」

「うん。」

大切な仲間が出来た私にはどんな未来が待ち受けているのだろうか。

第7話　悪口

あれから私は雪君達と別れ家に帰った。授業？そんなものはサボった。
自分で言うのも何だけど、私、クラスの人達よりは頭良いし。

そして、次の日・・・

「眠い・・・」

そう言いながらも私は起きて、学校へ行く準備をして学校へ向かった。
相変わらずクラスの人達は五月蝿い。こいつ等は静かにするということを知らないのかと思う位だ。

〈ガラッ〉

教室の扉を開け中に入る。・・・今日もなにも無いようだ。
よくみると、クラスの殆ど全員が雪君と直君の席の周りに集まっていた。
二人はやっぱり人気者だ。というか、これも虐めから私を守る事に繋がるのだろうか。

「あっ！須藤さんおはよう！！」

あの可愛らしく明るい声が響いてくる。

「おはょ・・」

挨拶を返そうと思った途端皆が睨み付けてくる。
私はあの眼が嫌いだ。あの眼をみるとどうしても逃げ出したくなる。

「い、嫌・・・」

私は耐え切れず教室から飛び出してしまった。

ー雪ｓｉｄｅー

俺はゆう子ちゃんを追いかけようとしたが、直に止められ仕方なく席についた。
ゆう子ちゃんが出て行ったのを確認するとクラスの女子が、

「あんな子に話しかけちゃ駄目だよ。雪君。須藤さんは愛叶ちゃんを虐めてる最悪な人なんだから。」

俺は腹が立った。真実も知らないで、無実の人を虐めているこいつ等に。

「ふざｋ

「止めてください。人の悪口なんて聞いてもこっちが不快になるだけですから。陰口がどうしても言いたいならこの教室からすぐにでて話して下さい。僕は、人の陰口を言うひとが大嫌いなんです。」

直がここまで人にきつく話すのは付き合いが長い俺でもみたことが無かった。

そのせいでクラスはシン・・・と静まりかえった。

「直くんって優しいんだねぇ。悪い人を庇うなんて。」

空気の読めないひと登場。しかも、陰口が嫌いだって言ってるのに。

「そうですか？僕はそれが当たり前だと思いますけど。皆さんは悪口を言うことが普通なんですか？それって大分ずれてますね。」

そう言って直は教室を出て行った。

第8話　殺し

「あっ！待って！」

そう言った時には遅く先生が教室に入ってきてしまった。

二人はどこに行ってしまったのだろうか。先生が来て捜す事が不可能になった俺は二人が戻って来るのを待つ事しかできなかった。

ー雪ｓｉｄｅ終了ー

私は教室から飛び出した後あの顔を、あの眼を忘れたくてひたすら走り続けていた。

「ハァ、ハァ。もう嫌だ。あの眼を見たくない。」

しかし、一階や二階には教室があり行くことはできない。

「そうだ、屋上なら・・・」

私は息を切らしながらも屋上へ向かった。

〈ガチャ〉

ゆっくりと屋上の重い扉を開ける。

「えっ・・・」

いつもはだれもいない屋上に黒いスーツのようなものを着た大人達

が銃をもってだれかを取り囲んでいた。
よく目を凝らしてみる。

「な、直君！！」

そう。真ん中にいたのは直君だった。

「ゆう子ちゃん。なんでこんな所に！来てはいけません！！逃げて。」

直君が必死に叫ぶ。逃げようとしたが・・・体が動かない。

「ｄａｒｋｐｒｉｎｃｅにこんな可愛い娘がいたとはな。」

なんかこいつ勘違いしてるくせに弱そうだ。

「ゆう子ちゃん、これを使って。」

そう言って直君が投げてきたのは一振りの刀だった。

「えっ！これ使うの？」

「ゆう子ちゃんなら使えると思うから」

私は受け取った刀で私の腕を掴んでる男を思いっきり斬りつけた。
男はその場に倒れこんだ。すると、直君の方にいた男がこちらに襲い掛かってきた。

「嫌！」

私はとっさに持っていた刀を振り回した。男のうめき声と倒れていく音が聞こえる。
恐る恐る目を開けると、私の周りにたくさんのおとこが倒れていた。
「え・・・これって全部私が？」
びっくりして放心状態になっていた。
「ゆう子ちゃん！危ない！」
私がうしろを振り向くと一人の男が発砲した。
避けられない！私は死を覚悟した。
「・・・あれっ？私生きてる？」
顔をあげると直君が目の前にいた。
「直君？」
「大丈夫だった？怖かったよね。ごめんね。」
「大丈夫。ありがとう・・・でもさっきのひとが撃った弾は？」
もしかして、直君にあたっているんじゃないかと思ったからだ。
「あぁ。さっきの銃弾は僕が落としました。ナイフで。」
「凄い。」
さすが殺し屋だ。五十はいたであろう男達をわずか三分程で倒して

しまった。

〈ガチャ〉

「いた！二人とも。・・・って！何これ！？」

「ん？見てのとーりだし。」

「みてのとーりって・・・。え！ゆう子ちゃん！？なんで直の刀持ってんの？」

「え？貸して貰った。」

「フツーに言わないでよ・・・」

じゃあ他にどう答えろというのだろうか。

「そういえば、これってどうするの？」

「あぁ。これは僕たちが処理しておくから、ゆう子ちゃんはもう帰ったほうがいいよ。」

「分かった。また明日ね。」

そう言って、わたしは雪君たちと別れた。

第9話　罪人は・・・

自分の家へと着いた私は、ベッドに寝転んだ。
そして自分の手を見つめる。

「殺したんだ。私がこの手で・・・」

今でもあまり信じられない。自分が人を殺したなど。しかも一度に大勢の人も。目を瞑っているだけで、さっきの男達のうめき声や死体の山が思い出されるようだった。

目を瞑っている間に私は眠りについてしまった。
目が覚めるともう既に朝だった。
私は準備をして学校に向かった。

教室の扉を開く。

〈バシャァ！〉

水だった。最近なにもなかったからといって油断していた私が馬鹿だった。雪君と直君はまだきていない。クラスの人達は嘘泣きしている愛叶ちゃんを囲んでいる。

「愛叶ね、昨日見ちゃったのぉ。ゆう子ちゃんが人を殺してるところ。私怖くてぇ、もしかしたら愛叶もゆう子ちゃんに殺されちゃうんじゃないかってぇ。」

どうして知っているんだろう？あの時屋上には私と直君と男の人達

しか居なかった筈・・・

「大丈夫だよ！愛叶ちゃん。俺達が守るから。ってかおまえ、人殺したのかよ。このクラスに罪人はいらねぇから。さっさとこの教室から出て行けよ。」

クラスの男子がそう言うと、クラスの全員が私に向かって、

「でーて行け！でーて行け！」

と言って来る。私は怖くて、教室から出て行こうとした。すると、

「やっぱ、気が変わった。皆！罪人は皆の前で処刑されるべきだと思わないか？」

この言葉を聞いたとき、私は嫌な予感しかしなかった。

「そうよ！罪人を逃がしちゃいけないわ！私達が処刑しなきゃ！」

すると、私は両腕を男子につかまれ身動きが取れなくなった。

「それってぇ、愛叶も参加できるかなぁ。」

「当たり前じゃん。いつも嫌がらせされてるんだから仕返しのつもりで」

「うん。ありがとぉ、皆！」

そして、私の方へ顔を向けた愛叶ちゃんは私を見て、ニヤリと笑った。

第１０話　救済

私は今、何処かの教室の中に閉じ込められている。
でも、何処の教室かは分からない。目隠しをされているせいだ。

〈ガラッ〉

扉が開く音がする。
このきつい香水の臭いからすると・・・

「須藤ゆう子。いい気味ね。私が皆に一言言うだけでこの様だもん。」

やっぱり。佐藤だ。

「あんた。最近調子に乗りすぎじゃないかしら?愛叶より直君と仲良くなちゃって!」

佐藤ってもしかして・・・

「私は調子になんかのってないよ。ってか愛叶ちゃんやきもち?」

「な、何言ってんのよ!あんたにやきもちなんか妬くわけないでしょ。」

いえーい図星　（笑）

「図星かー。愛叶ちゃんって直君みたいな人が好きなんだ。」

「うるさいわね！黙りなさいよ！」

〈バシィ〉

「・・・痛い」

頬を思いっきり叩かれた。

すると、叩かれたのは私の筈なのに佐藤が悲鳴をあげた

「きゃぁぁぁ！！」

これは悲鳴というより奇声だな。

〈ガラッ〉

クラスの人達が入ってきたのかたくさんの足音がする。

「おまえ、愛叶ちゃん殴ったのかよ。やっぱり最悪な奴だな。」

「ねぇ！そろそろ処刑を開始してもいい時間じゃない！？」

「そうだな。」

そう言いながらクラスの男子が私の目隠しを外した。

私のめの前には、金属バットやカッターなどを持ったクラスの人達だった。

「よし。始めるか。」

「うん！」

皆が嬉しそうに答える。
そして私に近づいてくる。
バットを振り上げる男子。私は大怪我じゃすまないだろう。

「えーい！」

〈バキィ〉

耳に響く嫌な音。私は顔をあげる。
私の前には直君がいて男子がふりあげたバットを片手で受け止めていた。

「大丈夫？」

いつものように優しく問いかけてくれる直君。

「うん。」

私は小さく頷いた。

「皆、何やってんの？〈笑〉」

雪君もちゃんと居る。
動揺するクラスのみんな。

「こ、これはだな・・・」

「うん。なに？」

容赦ない雪君。

「処刑よ！須藤がまた愛叶ちゃんを虐めたから。」

「そうなんですか？でも、一人の女子をこんなに大人数で。いいんですか？」

「い、いいだろ！愛叶ちゃんは虐めに反抗できないんだから味方してあげても。」

「そうよ！罪人は処刑されるべきなのよ！」

「そうですか。じゃあ僕達は貴方達を罪人とみなし処刑します。・・・という事でお前ら覚悟しろよ〈笑〉」

その言葉にクラスの皆がシンとした。

第11話　反撃開始!?

「な、何言ってんだよ今井。キャラ違うぜ」

クラスの男子が動揺しながらも言う。

「僕は普段からこんなキャラだけど?」

直君は微笑を湛えながら言う。

「って言うか私達処刑される理由なんか無くね!?なんで処刑されなきゃならないの?」

自覚が無いってある意味怖い。

「えー。なんでか分かんないの?もう、皆はバカだなぁ。ゆう子ちゃんだよ。」

「雪に馬鹿にされるって相当だね。」

直君の言葉って自分に言われてないとしてもグサッとくるなぁ。

「お前等さっきからなんなんだよ!罪人を庇ってさ。たった二人で何ができるっていうんだよ!」

「罪人を庇う?僕達はそんな事していない。後、僕達二人がいればここにいる人達全員終わりますよ（黒笑）」

「全員？そんなわけないだろ！俺等は三十五人、お前等は二人。何処に勝ち目があるんだよ」

「勝てますよ。」

クラスの人達は『何処にそんな自信があるんだ』と言うように笑った。

「じゃあ、試してみます？（微笑）」

「いいだろう！やってみようぜ！」

「そうよ！この人数なら。」

クラスの人達は雪君たちを睨みつけ、今にも勝負が始まりそうだった。・・・筈が

「ねぇ！みんな止めようよぉ。直君達はふたりなんだからぁ。」

とても嬉しそうな顔をしてた直君。佐藤がそう言った瞬間一気につまらなそうな顔になった。

「だよな！ごめん愛叶ちゃん」

そう言ってクラスの男子から謝られる佐藤。

「今日は愛叶ちゃんがいて助かったわね！二人共命拾いしたわね。」

教室を出て行くクラスの人たち。ってか、命拾いしたのはクラスの人達な気が・・・

第12話　意外に・・・

「行ったみたいだね。大丈夫だった？ゆう子ちゃん。」

「だ、大丈夫。」

慌てながらも答える。

「しかし、あいつ等凄く単純な奴等だな。」

雪君が問いかける。

「そうだね。あんな香水女の一言で動くなんて僕には可笑しすぎて。」

「だよな！俺でも嫌だ。」

二人共好き放題言ってるな。まぁいいか。私も少しは思っちゃったし。

「そういえばさー。なんであの香水女は皆を止めたのかな？」

それは多分直君かな・・・

「分からない。でも、なにかあちら側に不都合があったとみていいだろう」

絶対直君の事だと思うんだけど。直君って意外と鈍いのかな。

「ねー。多分なんかあったんだよね。」

「うん。」

今日分かった事実。二人は恋愛事に鈍すぎる！！

第13話　あれ？

私は自分の家に帰ろうとした。

「ん？どうしたのゆう子ちゃん。」

「あ、あのさ・・・立てなくなちゃった！」

私はさっきクラスの皆に殴られたりしたせいで足を痛めたらしい。

「えー！ゆう子ちゃん大丈夫！？」

「大丈夫だと思うんだけど・・・」

立とうとするがやはり痛い。

「無理はしない方が良い。雪ゆう子ちゃんを運んであげて。家まで。」

「うん。分かった！」

すると雪君は私をいきなりお姫様抱っこした。

「え！？ちょっと待って！私は大丈夫だから下ろして。恥ずかしいよ。それに私重いし！」

「大丈夫だよ！ゆう子ちゃん重くないし、ほんとは足痛いんでしょ。」

やっぱり見抜かれているようだ。

「じゃあいくよー。」

「うん。」

私は雪君にお姫様抱っこされながら眠ってしまった。

「あれ？ここ何処だろう。」

私は全く見覚えのない部屋にいた。・・・それにしても私が寝ていたベッドはすごくフカフカだし部屋も黒を基調とした部屋でとてもおちついた雰囲気だ。

〈ガチャ〉

いきなり部屋の扉が開いた。

「目が覚めたみたいだね。」

「あれ！？直君！どうして？」

「あぁ。びっくりした？ここは僕の部屋なんだ。」

「・・・えぇ！！！」

第１４話　ある意味危険だ・・・

「ど、どーしたの！！」

〈ガチャ！〉

凄い勢いで雪君が部屋に飛び込んできた。

「なんでもないよ。ちょっとびっくりしちゃって。」

「そっか。なら良かった！」

「・・・。」

何故か直君から殺気が発せられてる気が・・・

「あれ？直どーしたの？」

「・・・。僕はお前に何度僕の部屋の扉を破壊するなといったかなぁ？」

扉の方を見ると扉が見事に粉々になっていた。これが何回かあったというならさすがの直君も怒るよな。

「うぅ。え、えーと今回はわざとじゃないんだし許してくれｒ」

〈バーン〉

直君、いきなりの発砲

「許すわけないでしょ。僕は以前、お前が扉を破壊した時に許してやったんだからさ。」

そう言いながら銃を片手に雪君の方へ黒い笑顔で近づいていく。

「嫌だ、直に殺されるー。ゆう子ちゃん、助けて！！」

「え、あ、ごめん。」

さすがに銃を持っている人に勝てる自信はないし。

「えーゆう子ちゃん酷いｙ」

〈バーン〉

直君再び発砲。

「よそ見してると・・・死ぬよ〈黒笑〉」

「嫌だー！！！」

そう言って走り出す雪君。・・・まぁいろいろあって１０分後

「ごめん。もう7時になちゃった。」

「大丈夫だけど・・・雪君は？」

「ん？そこにいるけど」

直君のうしろには逃げるのに必死で既に疲れきってしまった雪君がいた

第15話　嘘だと思うなら

「えっ！雪君大丈夫？」

「・・・」

雪君が動かない。

「大丈夫だよ。ほっときな。」

「えぇ！あ、うん。」

それにしても直君は凄い。あんなにずっと走っていたのに息すら切れていない。

「あっ！そうだゆう子ちゃん。なんかお腹空かない？」

そういえば昼から何も食べていなかった。

「うん。空いたかも。」

「だよね。じゃあご飯にしようか。」

「え！ご飯までご馳走になるのは悪いからいいよ。」

「いいから、いいから。」

「うん。じゃあ、ありがとう。」

でも誰がご飯を作るのだろうか。私、あんまり料理できないし。

「ゆう子ちゃんはなに食べたい？」

「何だろう。パスタとか、イタリアン系？」

「良いんじゃないかな。じゃあ、そうしよう。」

「うん。でも誰が作るの？」

「ん？僕だけど？」

「えー！！」

直君って料理できるの！？全然そんな感じしないのに！

「直の料理はおいしーんだよ！！」

知らないうちに雪君復活。

「そ、そうなんだ・・・。」

「ゆう子ちゃん、信じてないでしょ。」

「えー、だって。」

「ゆう子ちゃん！嘘だと思うなら食べてみなよ！直の料理。」

「う、うん。」

そして待つこと１０分後・・・

「出来たよ。きのこのクリームパスタ。お口に合うか分からないけど。」

「ありがとう。」

見た目からしてとっても美味しそうなんだけど！

「いただきます。」

そう言ってパスタを口へと運ぶ。

「お、美味しい・・・」

「でしょでしょ！美味しいよね！」

「う、うん。」

これは、女の私より料理上手いかも。

「ありがとう。お口にあったみたいで。嬉しいよ。（微笑）」

「ほんと、美味しかったよ！・・・そろそろ遅いし家に帰ろっかな。」

雪君達の家に居ると楽しいな。

「えー！ゆう子ちゃんもう帰っちゃうのー！泊まっていけばいーの

にー。」

「ふぇ！雪君、何言ってんの。泊まれるわけないじゃん。」

女子の私が男子の家に泊まるなんてできる筈が無い。

「えぇ。良いじゃん。」

なんか、雪君の目がウルウルしてる。え、雪君泣いちゃうの！？私が泊まらないだけで？

「しょうがないなぁ。じゃあ、泊まらせて貰おうかな。」

あんな顔見せられたら断れない・・・

「（ゆう子ちゃん。見事に雪の上目づかいにひっかかったな。雪はほんと女子っぽいことするなぁ。全く）」

「わーい、ゆう子ちゃんが泊まってくれるー。」

第16話　何処で？

「泊まるのは良いけどさ、私はどこで寝れば良いのかな？」

「へ！？」

『そういえば』というように固まる雪君。

「僕は知らないよ。雪が泊まって欲しいって頼んだんだから。」

「えー。じゃあ！ゆう子ちゃんが直の部屋で寝て、俺と直で俺の部y」

「やだ。何で僕の部屋を僕が使えないんだ。普通なら僕は僕の部屋で、雪とゆう子ちゃんが雪の部屋でしょ。」

「え！何で俺とゆう子ちゃんが一緒の部屋なの！？駄目でしょ一緒にしちゃ！」

確かにそうだ。何故私が男子と一緒に寝なきゃならないんだ。

「いいじゃん、別に。雪は誰が同じ部屋にいても寝れるだろう。僕は、寝れないんだ。それに、雪は自分の部屋を片付けるのが面倒だから僕のへやをゆう子ちゃんに使わせようとしてるんでしょ。」

「・・・。」

図星みたいだ。雪君が再び固まってます（笑）

「黙ったって事はもう僕が言った通りにして良いってことだよね。じゃあ、雪。部屋の片付け、宜しく（黒笑）」

「（ °□ °）」

雪君、本日三度目。固まる。

第17話　お片づけ

２０分後雪君が戻ってきた。

「お、終わりました・・・」

「２０分も掛かるの？なら、凄く綺麗になったんだろうね。」

「う、うん。」

雪君が動揺してる？片付けたって言ってた筈なのに？

「じゃあ、見てみようか。ゆう子ちゃんもおいで。」

「？うん。」

〈ガチャ〉

直君が雪君の部屋の扉を開けた。

「あれ？雪？部屋を片付けたって言わなかったっけ？」

直君がそう言うのも無理ないか。だって、床に散らばっていたであろうものをベッドの下と机の上にどかしただけなのだから。

「か、片付けたよ！床にあったものなくなってるでしょ！」

無くなってるけど・・・ね。

「もう諦めて、ちゃんと！部屋を片付けようか。」

「雪君。私も、直君に同感。」

「うぅ。分かったよー。ちゃんとかたづけます！」

また少しすると雪君が部屋から出てきた。

「ちゃんと片付けました。」

「うん。お疲れ。」

こんどは直君が信じた。直君ってひとがうそついてるとか分かったりするのかな？

「・・・眠い。僕はもう寝るから。二人とも、おやすみ。」

直君は欠伸をしながら部屋へと入っていった。

「俺も眠い。俺のベッド使って良いから。おやすみ。」

「うん。ありがとう。おやすみ。」

雪君も部屋へと戻っていった。

「私も寝ようかな。」

私はそう言って雪君の部屋へ行き、ベッドをかりて眠りについた。

第１８話　真夜中に

随分と前に眠りについた私だったが、物音がリビングの方から聞こえ目が覚めてしまった。さっきまで寝ていた雪君の姿も見えない。私はそっとリビングにつづく扉を開けた。

「直。今日の標的（ターゲット）は？」

「標的（ターゲット）はフォンターナＦの幹部２５０人。」

声が小さいせいか何を言っているのか、私にはよく分からなかった。

「じゃあ、そろそろ行こうか。」

「うん。」

雪君達は外に出て行ってしまった。

「あっ・・・」

駄目な事だろうという事は十分に分かっている。でも、私は二人の行方が気になってしまう。・・・私は二人を追いかけて行った。

－直ｓｉｄｅ－

さっき、家を出る少し前、雪の部屋の扉が開いた気がした。もしか

するとゆう子ちゃんに仕事の話を聞かれたのではないか？最悪、着いて来てしまってる可能性だって・・・

「直？どうかしたの？」

気がつくと雪が僕の顔をのぞきこむようにして見ていた。

「ごめん。なんでもない。ちょっと考え事を、ね。」

「ふーん。そっかぁ。」

そんな話をして１０分後。

「着いた！直！此処だよね？」

雪がとても嬉しそうに僕に問いかけてくる。まぁそれもそうか。これから人をたくさん殺れるんだし・・・

「そうだよ。此処がフォンターナＦの本部だ。」

「やった！やっと着いた！どうやって本部に潜入するの？」

「ん？決まってるじゃん。」

「だよね・・・」

《正面からの強行突破！！》

〈バーン！〉

僕達は声と同時に本部の大きな門を足で思い切り蹴飛ばした。

第１９話　仕事（前書き）

黒闇です♪
前回の話が、直ｓｉｄｅで終わっているので今回の話の初めは直ｓｉｄｅのまま書いています。

第19話　仕事

「誰だ！？」

本部からたくさんの奴が出てくる。でも、こいつ等は幹部にもなれないただの雑魚みたいだ。

「僕達の事？でも、普通人に名を聞く前に自分が名乗るのが礼儀じゃないかな？」

「くっ！子供の癖にふざけた奴だ。俺の名前はm」

〈グサッ〉

「まぁ、言わせないけどね（黒笑）」

これから死ぬ奴等に名乗る名なんてないよね。

「一人、やられたぞ！皆、あのガキ共を殺せ！」

そう言って血の気の多い奴等が僕達の方に向かってくる。

「二人に対して千人以上ので来るのは関心しないなぁ。でも、まぁこんな弱い奴等なら一瞬かな。ね、雪。」

「うん。」

そして、僕達は敵がいる方へ歩いていく。敵と僕達がすれ違う。た

くさんの発砲音。

「うわぁぁ！」

倒れたのはあんなにたくさん居た雑魚共。僕達はもちろん無傷。まぁ、雑魚共の気色悪い返り血がべっとりとついてるけどね。

「雪。死体で遊んでないで行くよ。」

雪は昔から自分で殺した奴の死体をぐちゃぐちゃにして遊ぶ癖がある。相変わらずグロイ事が好きみたいだね。

「あ、待ってよ直！」

僕達は本部へと入って行った。

第２０話　本部（前書き）

直ｓｉｄｅが続きます。

第２０話　本部

本部はシンと静まり返っていた。

「ここ、静かだなー」

のんきなことを言ってる雪。

「そうだね。・・・早く仕事を終わらせよう。ゆう子ちゃんが家に一人だ。」

「あっ！そっかぁ。早く帰んないと！直、俺と遊んでくれる奴どこにいんの？」

「標的（ターゲット）は地下の会議室に集まってるはずだ。でも、Ｆのボスはまた別の部屋にいる。二手に別れるか、別れないか。どっちがいい？」

「えー。ボスとも遊びたいし、幹部とも遊びたいなぁ。・・・別れなくていいや。先に幹部んとこ行こ！」

効率でいえば別れた方が良いんだけどな。雪に聞かなきゃよかった。

「いいよ。じゃあ、会議室へ行こう。」

「うん。でも、どこから地下に行くの？下に行けそうな所ないよ？」

「ん？あるよちゃんと。」

「え？何処にあるの？」

「此処。」

〈ドーン〉

僕はバズーカで床を破壊した。

「えぇ！！！」

降りた所は会議室のど真ん中。既に何人かバズーカで死んでるけどまだ、殺れる奴はたくさんいる。

「皆さん。こんばんは。僕達、殺し屋のＢｌｏｏｄです♪・・・ってことで、貴方達には死んでいただきます。（黒笑）」

「直、無理やり繋げた。」

「五月蝿い。黙れ。」

幹部に囲まれた状態の僕達。僕達はお互いにせなかを向けた。

「そっちの奴等は任せたよ。」

「りょーかい。でも、あっちの敵は直に任せるから。」

「うん。」

そして僕達はゆっくりと武器を構えた。

今、この時大変な事が起きていたというのに・・・

第２１話　事件発生！？（前書き）

これは、直と、雪が仕事中の時のゆう子ちゃんの様子です。

第２１話　事件発生！？

ーゆう子ｓｉｄｅー

雪君達を追いかけている間に、随分遠くまで来てしまったみたい。

「ここ、何処だろう？」

一人呟く。

〈バーン！〉

凄く大きな音が響いた。これは、なんの音だろうか。

「こっちの方かな？」

私は、さっき音がした方に向かった。

「えっ！何これ！？」

私の前にあったものは破壊された大きな門と山積みになったたくさんの死体だった。しかも、なんかぐちゃぐちゃで気持ち悪い人？もいる。

〈ドーン〉

奥の建物からまた大きな音がした。もしかして、雪君達はこの建物の中に居るのだろうか？

「・・・行ってみよう。」

私が建物に入ろうとした瞬間、誰かが後ろから私の口をおさえつけた。

「んー、んー。」

抵抗するが、力が強く動けない。

そこで、わたしの記憶は途切れた。

第２２話　籠の中の・・・

―直ｓｉｄｅ―

武器を構えた僕達は目の前にいる幹部たちを次々と殺していった。

「はぁ・・・はぁ。やっと終わったー」

雪は気が抜けた事を言う。僕達の周りは血の海。それは全て幹部達のものだ。

「急ごう。雪。まだ、ボスを殺ってないんだ。」

「うん！ボスかぁー。楽しみだなー。」

嬉しそうだな、雪は。

「雪。こっちだ。早く行こう。」

「うん。」

そうして僕等はボスがいる部屋へ向かった。

―ゆう子ｓｉｄｅ―

「・・・此処は、何処だろう？」

目が覚めた私は辺りを見回した。知らない場所みたい。どこか、部屋の中であることは確かだけど。

「目が覚めたみたいだね。籠のなかのお姫様。」

いきなりの声に驚いた私は、声がした方に振り向いた。そこには、私と同じ位の年齢であろう男の子がいた。

「おはよう！ゆう子ちゃん。」

「・・・あなた、誰？それに、どうして私の名前を？」

「あれ？知らないの？俺、学校では結構有名人だと思ってたのになー。」

ニコニコと笑顔で話す男の子。でも、学校ってことは私と同じ学校にいる？

「じゃあ、ゆう子ちゃんの為に自己紹介してあげる。俺は、本橋(もとはし)美雷(みらい)女っぽい名前だけど男の子。学校では、生徒会長やってます。どう？俺のこと、知ってた？」

「ううん。分かんない。」

「ひどいなぁ。ゆう子ちゃん。」

「名前・・・。」

「名前？なんで俺が、ゆう子ちゃんの名前を知ってるかって？・・・それはねぇ」

〈バーン〉

突然の破壊音。

音がした方を見ると、そこには雪君と直君がいた。

第２２話　籠の中の・・・（後書き）

―作者の部屋１―

黒闇「今回の話は目線がよく切り替わるので読みにくかったと思います。すいません。」

直「だよね。僕もそう思った。きっと読んでくれた読者の皆さんもそう思うよ。」

黒闇「はい。反省します。」

雪「そういえば、作者の部屋って?」

黒闇「不定期で色々書こうかと思ってつくってみたんです。」

直「へー。まぁ、頑張ってくださいよ。駄作者なりに。」

黒闇「（駄作者って・・・）はい。頑張ります。では、今回の作者の部屋はこの辺で。」

雪「バイバーイ!!」

第２３話　困惑

「雪君！直君！」

「あぁ。やっと王子様のおでましかー。ｓｈｉｎｅ　ｐｒｉｎｃｅとｄａｒｋ　ｐｒｉｎｃｅ。」

ダークプリンス？シャインプリンス？私は意味が分からず、ぼーっとしていた。

「あれ？ゆう子ちゃんは意味が分かってないみたいだねー。ｓｈｉｎｅ　ｐｒｉｎｃｅとｄａｒｋ　ｐｒｉｎｃｅは君の目の前にいる二人の事だよ。」

「どうしてそんな呼び方をするの？」

私は問いかける。

「ゆう子ちゃんってなんにも知らないんだね。殺しの世界で活躍する人達はこの二人以外にもたくさんいる。でもさ、そのなかでも強い奴っているんだよ。たくさんのＦを潰し、たくさんの人を殺めた奴には、通り名っていうのがつくんだよ。分かるかい？」

通り名はたくさん人を殺した人に付けられる。じゃあ、雪君と直君は！！・・・・殺し屋って名前は怖いけど、雪君や直君は優しくて、私を守ってくれて、本当は悪い仕事じゃないと思ってた。でも、雪君や直君はたくさんの人を殺して・・・

〈バタッ〉

「上手くいったみたいだね。」

「ゆう子ちゃんに何をしたんですか？」

「なんにも？」

そんな筈はない。ゆう子ちゃんの目には光がなくなっていて表情も虚ろになっている。

「・・・嘘をつくな。お前が何かをしたことはわかってんだよ。」

「わー！怒っちゃった？俺はただ通り名の話しただけじゃん。」

こいつ、いちいち僕の感に触ることばかり言ってくる。

「怒る？そんなことないよ。でも、いちいち語尾とかのばすとかちょっとむかつく（黒笑）」

「あっ！」

雪がいきなり声をあげる。

「直、そいつ今俺達が行ってる学校の生徒会長！」

「やっと気づいたかー。さっき、ゆう子ちゃんに聞いたら知らないって言われちゃったからショックだった。」

「ん。そう。お前、誰なの？僕たちの名前はお前が知ってる通りだから。」

「え？俺は本橋美雷だけど？」

「それ、偽名だね。」

ずっとニコニコしてる奴。本当に見ててむかつくな。

「闇の王子様にはばれちゃったかぁ。俺の名前はねぇ・・・」

第２４話　正体

「俺の名前はねぇー、ミトラスだよ。通称ｎｅｂｂｉａ　ｄｉａｖｏｌｏ（霧の悪魔）」

「！！霧の悪魔・・・」

「直、知ってるの？」

知ってるも何もない。なんでコイツがこんな所に。

「うん。コイツは、いま僕達がおってる標的（ターゲット）佐藤愛叶のＦのＮｏ２だよ。」

「えっ！？でも、俺達が昔にみた顔写真とかおが全然ちがうよ？」

「ふふ！そんなの当たり前じゃん。昔のこと！なんでしょ。」

確かに昔、３年程前ではあるが３年位でそう顔なんて変わらないと思うが・・・。

「分かったよ。君、幻覚使いだろ。今の顔は幻覚で見せてる嘘の顔で、顔写真の方が本当の顔。違うかな？ミトラス君。」

「あったりー。流石、闇の王子様。頭の回転が速いね。」

「それはどうも。じゃあ、正解したんだからご褒美がほしいな。」

「闇の王子様ってながいから違う呼び方するよ！ヤミちゃんは面白

いこと言うね。で、何かな？なんでもいいよ。」

「じゃあ、「なんでもいいの！？じゃあねー、えっとー。」・・・・」

雪・・・。大事なところで出てきやがって。

「雪、黙れ、一回死ね、消えてなくなれ。」

「うぅ。だって、なんでもっていうからぁー。・・・グスッ」

うわ。泣いたしコイツ。泣くと面倒なんだけど。まぁいいや。

「わぁー。ヤミちゃんが光の王子様泣かせた！」

「五月蝿い。黙れ。で、さっきの話だが・・・」

「うん。何が良いかな？」

「決まってるじゃん。お前の死（黒笑）」

第２５話　能力（チカラ）

そう言って僕はナイフをミトラスの首元に突きつけた。

「僕がこのナイフを少しでも動かせばお前は死ぬよ。」

「えー。死にたくはないなぁ。望むなら何か他のことにしないかい？」

こんな時までニコニコしてるなんて変な奴だ。

「いいよ。ほかの事にしてあげよう。」

「ありがとう。さすがに死ぬのは嫌だからねぇ。でも、なんか立場逆転してない？」

「気のせいだよ。ね、雪？」

「ふぇ！？あーうん。」

やっぱり語尾を延ばす奴は生理的に受け付けない。

「そっかぁ。まぁ、いいや。で、どうするの？」

「じゃあ、ゆう子ちゃんにしたことを話した上でそれをといて貰おうかな。」

ミトラスは少し考えてから、

「いいよー。」

っと言った。

「じゃあ、教えて貰おうかな。」

「うん。あれは、俺の能力(チカラ)だよ。その秘密は言わないけどねー。」

「・・・。早く、ゆう子ちゃんをもとに戻せ。」

「分かったよー。じゃあ、君が俺に突きつけてるナイフ、どうにかしてくれるかな。」

「・・・」

僕は無言で手を離した。すると、ミトラスは一回だけパチンと指をならした。

「これでオッケー。・・・じゃあ、俺は行くからまたあそんでね、二人の王子様。」

「あ、まって!」

雪が止めたがミトラスは窓から外へ飛び出していった。

第２６話　目覚め

本橋美雷って人が何かを言った後私の記憶が途切れた。

ふと目が覚めた私はゆっくりと目を開けた。ここは、雪君の部屋のようだ。

「あっ！ゆう子ちゃんが起きた！ゆう子ちゃん、大丈夫？」

雪君が声をかけてきた。何故かやけに声が大きく聞こえる。声がしたほうを向くと雪君の顔が数センチのところにあった。

「わぁ！びっくりしたぁ。有難う大丈夫だよ。」

そう言うと雪君の顔がパッと明るくなった。

「雪君可愛いね。」

「えっ！？」

ヤバッ！つい口にだしてしまった。

「な、なんでもないよ。」

「ホント？」

「うん。」

「でも、ゆう子ちゃん顔真っ赤だよ。熱でもあるんじゃ・・・」

え、私の顔そんなに真っ赤かな。すると、雪君がいきなり顔を近づけてきた。

「？？」

雪君は自分のおでこをわたしのおでこにくっつけた。

「へ？」

「熱はないみたいだね。」

さらに私の顔は真っ赤になっていく。私はそのまま後ろへ倒れこんだ。

「えー！ゆう子ちゃん、大丈夫！？」

その光景を部屋の外から見ていた直はクスクスと笑いながら部屋を後にした。

第２６話　目覚め（後書き）

―作者の部屋２―

黒闇「どーも、黒闇です♪」

雪「雪でーす。」

黒「今回は久々の更新となりましたね。」

雪「うん！俺も久しぶりに登場できて嬉しかったー。」

黒「それはよかったです。今回は恋愛モノ風にしてみました。黒闇は女ですが、あまり女っぽくない性格なんで書くのにとても苦労しました。」

雪「え！？あれって恋愛風だったの？」

直「完全にそうだと思うよ。だいぶベタだけど。」

黒「ベタな展開ですいません。でも、次は頑張りますよ！そろそろ学校にもどらないといけませんから。」

直「・・・ヤダ。」

雪「何か凹んでる直はおいといて。今回はここまでにしたいとおもいます！」

黒「長文失礼致しました！では、また次お話しましょう♪」

ゆう子「バイバーイ」

黒・直・雪「え、何時から？・・・」

第27話　朝は大忙し

その後、もう一度眠りに着いた。

そして朝。私は大きく背伸びをして立ち上がった。

「もう、朝かぁ。雪君はまだ寝てるのか。」

私が扉を開くと直君がキッチンでご飯を作っていた。

「おはよう。直君。朝早いんだね。」

「あっ！ゆう子ちゃん、おはよう。ご飯を作るのは僕だからね。いつもの事なんだよ。」

女の私でも凄いと思う、直君の手際の良さ。

「もう出来るから座っててよ。」

「うん。」

私は返事をして椅子に座った。少しすると直君が料理を運んできた。

「おまたせ。先に食べてていいよ。僕は、雪を起こしてくるから。」

直君はそう言うと怪しげな笑みを浮かべて部屋へと入っていった。

それを不思議に思った私は、雪君の部屋を扉の隙間から覗き込んだ。

「雪。早く起きな。学校遅れるよ。」

優しく雪君を起こそうとする直君。

「にゃ、もうちょっとだけ・・・。」

「そっかー、もうちょっとかぁ。」

急に声色を変えた直君が懐からスティックのようなものを取り出す。

「・・・って、許す訳が無いよね。」

直君はそう言うと思い切り雪君の腹部にスティックを振り下ろした。

「！！・・・・。いったぁ。直、酷・・・いよ・・・。」

「お前が起きないからいけないんだよ。遅刻したらお前のせいだからね。」

言い方はとても優しいのに目がまるで笑ってない直君。恐いです。

「はやく起きてこいよ。来ないとお前のご飯、無いからね。」

と、冷たく言い放った直君はこちらに歩いてきた。私は、慌てて椅子に座る。見ていた事気づかれていないだろうか。どちらにせよ見てはいけない物を見た気がする・・・。

「もうすぐ、雪出てくるから。」

「うん。」

「まぁ、知ってたと思うけどね。」

「へ！？」

まさか気づかれていたのだろうか。

「やっぱり。さっき扉の隙間から見てたよね。」

「うん・・・。」

「あー。ゆう子ちゃんおはよう。」

突然、後ろから声がした。振り向くとお腹をおさえてやっと立てるような状態の雪君がいた。

「大丈夫！？」

「大丈夫じゃｎ」

「早くご飯を食え。遅れる。」

「ハイ・・・。」

大丈夫じゃないと言いかけた雪君だったが見事に直君に遮られてしまった。

「ふぅ。お腹いっぱい。」

雪君がご飯も食べ終わり、準備が出来た私達は学校へと向かった。

第２８話　登校

雪君達と一緒に学校に歩いてきた私は校門の前に来て立ち止まった。
体が動かない。入ろうとするだけで体が全力で拒否する。

「どうしたの？」

直君が気づいて話かけてくれた。

「体が、動かないの！」

「体が？」

「うん。」

直君はそう言うと考え込んでしまった。

「ゆう子ちゃん！」

「はい！？」

雪君に突然呼ばれた。

「虐めは怖いかもしれないけど頑張ろうよ！俺達がいるんだからさ！俺、虐めに負けるようなゆう子ちゃん好きじゃない。」

雪君にこんな厳しい事をいわれたのは初めてかもしれない。

「・・・。雪君、ありがとう。」

自然に私の体は動くようになっていた。

「ん。じゃあ、行こうか。」

「うん！」

私は校門を潜り校舎の中へと入っていった。

第２９話　転校生再び

私達は教室の前まで来て立ち止まった。ドアには何も仕掛けてないみたい。

「扉は平気そうだね。あんまり長くここに居ても駄目だから入ろうか。」

「・・・うん。」

私がドアを開けようとしたら雪君に止められた。

「俺が開ける！」

「あ、ありがとう。」

〈ガラッ〉

勢い良くドアを開けた雪君。でも、クラスの人達は私達を見ても何もせず話し始めてしまった。前にもこんな事があった気がする。

「珍しいね。香水女達が何も言ってこないなんて。」

「ねー！いつもなら、その辺で嘘鳴きしてんのにー」

「鳴きって・・・。」

「まぁ、ある意味合ってるよ。あいつは泣くというより鳴くだから

ね。」

そんなことを話していると先生が来た。

「おはよう。今日は皆が知ってる通り転校生が来るぞ。」

そうだ！雪君達が転校してきた時もこんな感じだった筈。

「じゃあ入ってきてくれ！」

「はい。」

入って来たのは、暗そうな雰囲気の男の子だった。でも、その容姿はとてもかっこ良く女子がきゃあきゃあ言っている。

「五月蝿い。」

直君がイライラしてる。

「じゃあ、自己紹介してくれるか。」

先生が転校生に言うと転校生はコクコクと頷き皆の方を向いた。

「初めまして。彌兎川（みとがわ）　霜（そう）です。よろしくお願いします。」

「席は須藤の逆隣の席だ。」

私の席の近く、転校生しかいない気がする。

「須藤さん、何処に居るの？」

「ここだよ。」

「・・・有難う。」

彌兎川さんがはじめて笑った。

「うん。」

私も出来る限りの笑顔で返した。

「うーん。」

雪君はなんだか難しそうな顔をしていた。直君の方を見ると直君も。

どうかしたのかな？

第３０話　疑問

その後もずっと雪君達はなにか考え事をしているようだった。
授業も全て終わったが今日は特に何かされたりすることは無かった。

『よかった。』とほっとしていると雪君に話しかけられた。

「今日って俺達の家来れる？」

「えっ！今日も行くの？」

「うん！」

とても可愛らしい笑顔でこちらを見つめてくる雪君。・・・しょうがない。行きますか。

「いいよ。じゃあ、あとで行くね。」

私がそういうと雪君はとても喜んでいた。なんで私、雪君にこんな好かれてるのかな？

「うん！じゃあ、待ってるからね！！」

雪君は走っていってしまった。

私は家に戻ったあと、雪君達の家へと向かった。

〈ピーンポーン〉

インターホンをならす。

「ゆう子ちゃんだ！」

雪君の明るい声が響いてくる。

〈ガチャ〉

「入って、入って！」

雪君に言われて部屋に入ると、

「あ、さっきぶりだね。須藤さんだっけ？」

・・・なぜか彌兎川さんがいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3588u/

救世主は最強の殺し屋！？

2011年11月16日13時08分発行